

# 「Japan IT Week 春」と「テクノロジーでめぐる異世界展」

神谷 直亮

本稿では、4月に取材した「Japan IT Week 春」と2月末から3月末にかけて開催された「テクノロジーでめぐる異世界展」についてレポートする。

## 「Japan IT Week 春」

第31回を迎えた「Japan IT Week 春」（主催：RX Japan）は、4月6日から8日まで東京ビッグサイト東展示棟で開催された。「IoT & 5G ソリューション展」「ソフトウェア&アプリ開発展」「情報セキュリティ EXPO」など12の専門展で構成される日本最大のIT分野の展示会で、主催者の発表では460社がブースを構えたという。

広い展示会場で筆者の目についたのは、サン電子、アルファコード、ポケット・クエリーズ、バルテス・モバイルテクノロジー、テクノ・マインド、Hanwha Techwinである。

3年ぶりの出展を果たしたというサン電子は、スマートグラス専用の「Ace Real Assist 遠隔作業支援ソリューション」のデモに力を入れていた。対応するスマートグラスとして紹介されたのは、Realwear社の「HMT-1」と「Navigator 500」、Google社の「Google Glass Enterprise Edition 2」、Vuzix社の「M400」と「M4000」

である。

「Ace Real Assist」は、マルチスマートグラス対応の他に、現場の通信環境に合わせて通話品質を自動調整する機能、シンプルで分かりやすいデザイン、対象物や映像範囲を確認しながらのカメラ位置調整、電源を入れてアプリを起動するだけですぐに使用できる簡単接続対応などを特色としている。ブースに並んだスマートグラスの中から促されるままにいくつかトライしてみたら、使用する現場環境とその作業内容や役割で最適なスマートグラスが変わることが良く分かった。

「HMT-1」は、4個のマイクを装備し、高性能なノイズキャンセリング機能を搭載しているためハンズフリーの作業に向いている。

「Google Glass Enterprise Edition 2」は、ARスマートグラスのエントリーモデルで非常に軽量ながらカメラ、タッチパッド、バッテリーを搭載している。スタイリッシュなデザインながらシンプルな操作性がウリである。

Vuzix社のフラッグシップモデルの「M4000」は、有機ELシースルーディスプレイを採用したハイエンド製品で、非常にスムーズな印象を受けた。

アルファコードは、ブースのほとんどを

使ってメタバース空間で課題を解決する同社の「コミュニケーションVR」のデモを展開していた。ブースの担当者は、「誰でも簡単な操作ですぐに体験できる最先端ソリューションである。ヘッドマウントディスプレイを装着するだけで、VR空間内で複数人の交流を実現する。見せたい3Dデータの再現も自由自在である」と売込みに余念がなかった。利用料については、「年間導入プランで170万円（対応クライアント50）、イベントプランで一回50万（対応クライアント10）」と述べていた。イベントプランは、リハーサルに最大5日、本番2日を想定しているとのことであった。

ポケット・クエリーズは、同社のVR技術とソフトバンクの5Gネットワークを活用する遠隔支援サービスを売り込んでいた。遠隔地での集合研修や作業場での支援に特化したサービスである。特色については、「仮想空間上でアバターの操作やコンテンツの同期再生ができるアプリになっていること」と説明していた。

スマホアプリの開発・保守・セキュリティ診断を得意とするバルテス・モバイルテクノロジーは、アバターを使って「VR空間内の好きな場所に瞬時に移動できることを実証するデモ」を実施して注目を集めた。ヘッドセットには、「Oculus Quest 2」



写真1 サン電子は、Google GlassやRealWearなどのスマートグラスに対応する「Ace Real Assist 遠隔作業支援ソリューション」に力を入れていた。



写真2 アルファコードは、メタバース空間で課題を解決する同社の「コミュニケーションVR」のデモを展開して注目を集めた。



写真3 「テクノロジーでめぐる異世界展」の目玉は、「視界全体が覆われる高精細 VR 映像」であった。



写真4 画面を曲げることができる30インチのフレキシブル有機ELディスプレイも注目的になった。

が採用されていた。

テクノ・マインド(本社:宮城県仙台市)は、高騒音に強い「音声ハイブリッド入力現場システム」を紹介した。音声認識入力に加えて、タッチ入力、QRコード入力、手書き入力、写真確認などができるのが特色である。雑音除去方式について聞いてみたら、「2マイクを用いた独自のノイズ除去方式」とのみ答えていた。

変わったところでは、Hanwa Techwinが「COVID-19向けソリューション」「非接触型のIPインターコム」「遠隔エリア向けソリューション」「IPビデオ管理プラットフォーム」を紹介して来場者の関心を買っていた。「COVID-19向けソリューション」については、「Wisenet AIカメラを利用して発熱者の検出、マスク着用のチェック、混雑状況の管理などができる」と説明していた。「非接触型のIPインターコム」に関しては、「広い画角を有し、光源のない環境でも物体を識別できるので、介護や医療施設に向いている」と売り込みに余念がなかった。

### 「テクノロジーでめぐる異世界展」

「テクノロジーでめぐる異世界展」という少々変わった展示会は、2月26日から3月27日まで、渋谷スクランブルスクエアの14階に設置されたNHKプラスクロスSHIBUYAで開催された。「表現者と技術者が生み出す異世界」がテーマで、「8Kがいざなう実世界展」(1月29日から2月25

日まで同会場で開催)に次ぐ第二弾という位置づけである。意表を突く「プラスクロス」という名称が気になったので聞いてみたら、「さまざまな楽しみや発見をプラスし、新たな世界や人とクロスするというコンセプトにもとづいて付けられた」とのことであった。

モダンな雰囲気のある展示会場に入ってみると、様々なテクノロジーに基づく7つのユニークな体験の場が提供されていた。

まず目を引いたのは、「視界全体が覆われる高精細VR映像」だ。85インチの曲面4K OLEDディスプレイを縦にして水平方向に5台組み合わせ視野角200度の画面を実現して来場者を魅了した。説明員は、「没入感と臨場感を感じてほしい」と語っていた。次いで、床置ききのLG製88インチ8Kディスプレイによる映像デモが注目を集めていた。デモ映像については、「イタリア出身の映像作家のサンドロ・ポッチ氏が主催するアート集団、Julia Set Labの作品で、バーチャルの限界を超えて共有する体験を探究したもの」と説明していた。目を凝らすと自然界の現象が抽象的に映像化されているのが分かった。

さらに、画面を曲げることができる30インチのフレキシブル有機ELディスプレイが展示され来場者の関心を買っていた。薄いフィルムを基盤にしたディスプレイの厚さは0.5mm、重さは100グラムとのことであった。説明員によれば、シャープとNHK技研の共同開発で、ディスプレイを丸めると直径4cmになるという。

4つ目は、220インチ大画面による

8K映像の上映であった。近寄って見ると、103インチを6台組み合わせていた。上映されたのは、中山晃子画家による色彩と流動の持つエネルギーをフルに表現した「Alive Painting」シリーズであった。

続く5つ目の会場では、收音技術のデモが行われていた。NHKが開発した昆虫マイクと水中マイクでかすかな音を巧みに收音していた。具体的には、昆虫マイクではカタツムリの心音やアリの歩き回る音を捉え、水中マイクではイルカの鳴き声を收音し、再生していた。スピーカーは、Generec製???

6つ目は、ボックス型触覚デバイスによるデモで、視覚聴覚に加え触覚の刺激もしっかりと感じながら映像の鑑賞を促していた。

最後は、22.2ch立体音響の試聴デモで、来場者は包み込まれるような音を楽しんでいた。気になったのでチェックしてみたらスピーカーは、ドイツのMusikelectronic Gethain GmbH製NE25型であった。

ちなみに1月29日から2月25日まで、先立って開催された「8Kがいざなう実世界展」の内容は、「8Kで、見えないものを見る」「8Kで、私たちの営みを知る」「8Kで、行けないところに行く」の3つのカテゴリーで構成されていたという。見逃してしまったのが残念である。

Naoakira Kamiya  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト